

長野県革新懇ニュース

2024 年 11 月号
発行日 11 月 10 日
会 費 2,000 円
購読料 3,000 円 (送料込)
振 替 00510-3-15971

301

発行 日本と信州の明日をひらく 県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人：山口光昭 編集長：高村裕
〒380-8790 長野市県町 593 高校教育会館内
TEL：026-234-1231 FAX：026-234-2219 メール：mail@nagano-kakushinkon.com

=====今号の主な記事=====

- 1 面 神山征二郎さんインタビュー
2 面 1 面続き、「松枯れ対策をめぐる諸問題」村山隆さん
3 面 第 50 回総選挙の結果と今後の展望、冤罪はこうして捏造された
読者の声、漢字パズル
4 面 「雨よ降れ」 夢は叶わず 窪島誠一郎さん
「写真で辿る信州と戦争」 北原高子さん
映画評論『Shine』 内山到さん

長野県革新懇

檢 索



1941年岐阜県生まれ。1971年『鯉のいる村』で監督デビュー。1976年『二つのハーモニカ』により日本映画監督協会新人奨励賞受賞。1983年『ふるさと』を発表。文化庁優秀映画奨励賞を受賞するなど国内外で高い評価を受ける。1987年『ハチ公物語』を大ヒットさせ、山路ふみ子映画賞受賞。その後独立し、『白い手』『ひめゆりの塔』『郡上一揆』『草の乱』など多数の代表作を手がける。

『シンペイ歌こそすべて』

20 年来の構想の結実作品

こうやま せいじろう
 神山 征二郎さん

(映画監督)

中山晋平さんは
ヒットメーカーの元祖

少なくとも20年前から中山晋平を主人公にした映画をつくりたいと思っていました。実は小さい頃から歌が大好きで、地元のど自慢に出場し準優勝したことがあるほどの実力(笑い)で、その頃は本気で三橋美智也のようなプロの歌手になりたいと思っていました。

後々、私の師匠であり、文化勲章を受賞された偉大な映画作家の新藤兼人さんの脚本で『枯れすすき』という舞台の演出を手掛けたことがありました。主人公は「おれは川原の枯れすすき」で有名な

な野口雨情ですが、全国で315舞台ほど上演して大ヒットしました。雨情さんと晋平さんは長らくコンビを組んでいたのですが、晋平さんも登場するのですが、主役は雨情さんですから晋平さんは脇役でした。

それ以来、晋平さんのことは頭の片隅にあつて、その生涯を描くなかで良い歌が次々と出てくるような作品ができないかとずっと思っていました。晋平さんは、言うならば日本のヒットメーカーの元祖みたいな方です。大正時代にラジオやレコードが普及し、それまでは歌なんて生で聴くしかなかったのが、身近で聴けるようになりました。その時に晋平さんは次から次にと名曲を作って大流行させた稀有の作曲家です。

『シンペイ歌こそすべて』

長野県内上映館
いずれも11月22日より
◆長野グランドシネマズ
◆TOHO シネマズ上田
◆松本シネマライツ

もう一つは、私は岐阜の田舎の農家の次男坊で家督は継げない立場でしたから18歳で東京に出たのですが、晋平さんも信州中野の新野の農家の四男坊で、18歳で東京へ出ています。何となく他人とは思えない所があつて、そんな境遇も晋平さんをやりみたいと思つていたものにありました。

そういうしているうちに大
学の後輩で音楽に強い映画ブ
ロデューサーの新田博邦さん
から声がかかり、4年前に映

県内の口ケ地は
全部知っている

Q どのように撮影場所をえらばれたのですか？

晋平さんは大正から昭和にかけて活躍した方ですから、映画的に言いますと、もう時代劇なんです。ほとんど車は通っていませんし、道はもちろんアスファルトではなく、住宅もほとんどは木造です。

当然のことながらその時代を残すところはなかなかありません。その点、長野県内には適当な口ケ地がまだあつて、中でも上田はよく知っているところなので、上田を中心にして撮影したのはそのためです。

商売柄で県内各地、どこに何があるか全部知っていると、言っても過言ではありません。10年ぐらい前ですが、上田市の西部にある浦里小学校を初めて映画で撮影したのは私です。信州大学の繊維学部があります、あそこに古い講堂があるんですよ。それを

私は全部知っています、中もたびたび見ていますから、この階段のところであの場面が撮れるとか具体的にイメー

ジできる。長野市の旧県庁ちよつと山の上の方に移築されていますが、あれも今時はないかないんですよ。玄関入ったところの階段の感じが非常にいい。映画ではあれを東京芸術大学にしています。それから、長野市の七二会に古い学校跡が残っています。そこで、晋平さんが東京へ出

る前に勤務していた学校に設定しました。それから、昔、

外務大臣をやられた小坂善太郎さんの家が残っているということで、そこを紹介されて行きましたが、あれは晋平さ

んのお母さんのご実家の山田
本家という設定にしました。
あと松本市は深志高校、あそ
こにもいい講堂が残ってい
て、ピアノも置いてあって、
晋平さんが野口雨情と歌手を

伴ってあちこち呼ばれているのですが、発表会に『シャボン玉』を歌う場面をあそこでもやっています。あと佐久でもやっています。

テレビの全盛期に
映画監督をめざした

Q 映画監督を目指されたときの
ご苦労をお聞かせください。

私が映画監督をめざした1950年代は映画全盛期の時代でした。年間入場者数が14億人でしたから当時の人口の14倍です。だから大変人気があり、映画監督になるには千倍の助監督試験を受けなければならなかったほどのようです。具体的によく言われるのは、松竹もダメだった、東宝も落ちた、東映も全部ダメだった、仕方がないから朝日新聞に行くか、そういう時代だったらしいです。

日本大学芸術学部映画学科に入学し、監督コースに入りました。だから18歳からずっと監督の勉強はしているのです。映画監督になること以外はあまり考えていなかったですね。

大学に入学したのは1960年でしたが、その頃

からテレビ全盛時代が始まって、あつという間に映画の入場者数が3分の1になり、10分の1になってしまいました。今は1億2千万人位だそうですね。

それで、どこかの撮影所の試験を受けようとしたら採用試験自体がなくなってしまうわけです。しかし当時、戦後のレッドパージで追い出された今井正さんや山本薩夫さん

んななどの監督や脚本家、プロデューサーがたくさんいて、撮影所は追い出されたけれども、皆さん意気軒高で独立プロを興して映画作りを続けら

もその一人で、私の場合は新藤監督にお世話になることができました。しかし、独立プ

食うや食わずの助監督生活を
送りました。時々、講演の依
頼があつて学校などに行つて

助監督時代の苦労話をしますと、女性のお客さんがハンカチを出して、目頭を拭くようなこともよくありました。

映画産業の斜陽化の中で業界も慌てて、エッチなものと暴力団もの、要するにテレビでは流せないようなものにシフトして活路を開こうとしていました。

しかし、そんなものは子どもには観せられないじゃないですか。だから、教職員組合の先生方とか保護者の皆さんが、子どもがちゃんと観ることができる映画を作ろうというところで、「親子映画運動」が興き、全国に広がっていききました。ちょうど私が監督になる頃でした。制作を求められても信じられないような低予算でしたので、大監督の新

【2面に続く】

【2面に続く】